通俗日本小史　第九編　下

渡邊義方編輯

A557
18

# 通俗日本小史九編巻の下

東京　渡邊文京操觚
深崎延房撿閲

却ッて説く正成既ま討ましよそれを賊の二軍尊氏直義相合ーそ一とゑり以て新田氏ま當る義貞ま見て西の宮より上る敵ハ數ゑりを湊河より懸る兵ハ尊氏直義ま覚めるぞ是あそ願ま所の敵ゑれと西の宮より取て返ー生田の森を後ゑとり四方餘騎と三手ま分て敵と三方ゑぞ受られる去程ま両軍互



48-8449

ひよ相進み決戰數合官軍利なるを生田の森の東より丹波路さして落行く賊軍勝に乘りて追擊まるを甚だ急なり義貞親ら殿戰して退く程に乘りたる馬に矢七筋まで立たれを小膝を折て殪れぬ義貞求塚の上に下立て乘換の馬を待たまへを迅くも見認て賊兵ど擊取んと先めく其猛勢に辟易して敢て近くへ進み得ず遠矢に掛て飛來る矢へ雨雹の降よりも繁く義貞左右の手に二刀を揮ひ下る矢をば飛超え上る矢に差俯むき中まる矢へ太



刀を交へて十六まで切落して遁れ出る田の狩場の雉子吐嗟擊ま取逃く見えたまへ折ふし馳來る小山田高家已ど馬に義貞を乘まわらせ其身へ徒立にて追來る敵を斬靡け乱軍の中に擊れぬを其間に義貞へ味方の隊中に馳入りて虎口の難を遁れて殘兵六千余騎を以て丹波路より帰洛ぬ是れを京中の周章一方ならず上下皆色を失ひ官軍若戰ひ利あらば前の如く東坂本へ臨幸なるべきに兼てより治定なりぬを主上まず神器を奉ぶて京師を

あらそい出たまふ浅猿や元弘のをドあ王政古へよ復し
て萬機の政事を新よせらるゝ事と過ぎ三年と未ず三年と過
ぎるよ國賊再たび逆威を振ひ六十餘州よ塗毒と流
し乱亡苦しき麻糸の蒼生きんよ安らを然いあれ
ども去る春の戦ひよ朝敵忽まちち負て西海の浪
よ漂よひしらべ是聖德の顕をる処なり今いしも
国安を妨害し国家を轉覆せんと企だつる者いなり
ドとあを覚えつるよ西戎忽まち襲ひ来て一年の
内よ両度まで天子都を移きせたまんをあを浅猿の

限りやと歎息せざる者もなうをるる」尊氏代りて京
師よ入り正成ゞ戦死の狀を聞きて深く心よ痛惜し
今い敵をるるもの舊好の程も憫然なり跡よ残り
し妻や子の嘆きり左あを思ひ遣る假令空しき殼な
りしを慰さむ術をもなれりと正成ゞ首を故郷な
る河内の遺族へ送られるる楠の後室子の正行ば
更あり一族の者聚まりて嘆き悲しむをの中よも後
室い涙を呑ミ呑ミ天ゞ今度の出陣い豫て亡身と思ふ
をしをて正行きんよ遺訓して途中より返されさま

慈母泣て正行を諭し父の遺訓を全ふせしむ

を出ーを限りの別とおもひて覚期へ赴くべきを
変り果たる本所の首級を見るよ目も眩き心も消
え堰止めあへぬ千行の涙遣方もなく歎きせり今
年十一歳よ成る正行父が首級の生る時よも似
ぬ有様と母が嘆きと慰さめかね流す涙を押へ持
佛堂の方へ行くを我母も怪しく思ひつゝ跡を尾ふて
従ひゆき障子の間より窺ふとも知るや知らぬや
正行も父が遺念の短刀をやをら右手よ抜持て袴
の腰を押下つ自殺をさんぜ有様よ吐嗟とぞ母





刀兒へ障ての障子かー開て急ぎ側よ走り寄り刃持
手よ取縋り涙よ曇る穀荒らげ血迷ふたるゝ正行
よ汝幼きくとも父が手うゝを是程の理よ迷ふべき
や子心ゆも思ふ乃父の遺訓へ何と聞たる自殺をせ
よとゝ宜まゝまド汝が遺訓を奉ドて櫻井の驛より
帰りて吾よ告げ而ーて汝既よ忘れ果て素より期ー
たる乃父の最期を聞て狼狽まいり死るんと狂ふを
何事ぞや徒る柔弱の心ゆてを王事よ任べーとい
思ひもよゝぞ悲ーき哉と身を揮へド且泣き且言

励まし立て持たる刀を捻取りつゝ我破と俯し泣倒る母ゞ詞よ正行も奮然として大ひよ悟り夫より後を父の遺訓母の切言肝に彫つけ心に銘ず君父の讐なる尊氏をやつゝ撃ぞ置べき欤と常住座臥忘るゝ時なく常に兒童と遊び戯むるゝ戦闘の状をまゝて首を斬る真似しまゝ朝敵の頭を捕るゝりと言ひ或時い竹馬に当て是い足利を逐まりと云ひ雖し果敢き手遊びに至るまでも只其の事とのみ業とせる心の中もそ恐ろしゝれ主上京師を



出て再び山門へ臨幸まりしゝば尊氏則ち京師に入り高師直等を大将として数万騎を率ゐて山門を攻めんと三百余所に陣を張り雲霞の如くに押寄せ義貞義助諸軍を以て東の坂口を防ぎ叡山三千の衆徒等をして西坂口を防ぐしむ賊その強弱を計り先西坂口を攻む衆徒等力を尽し死を決めて防ぎ戦に其のうゝ素より微弱の法師輩争でゝ大敵を防ぎ得べき猛勢遂に支えがたく危急の旨を義貞の陣に告げて頻りに援兵を乞ひしゝば義貞乃ち紀清

西黨の兵を率ゐて西坂口へ赴き攻め援け血戰數合賊を谷より擠ひしぎ數千人を殺し因て大嶽より陣を賊まさ進擊の針路を轉じて東坂を攻む待設けさる此隊の大將脇屋義助精兵三万を以て堅く守り兵船七百余艘より撞楯を撞て湖水の澳より浮べて防戰の準備かきく厳重なるものこゝ此方も屈せぬ寄手の大軍多勢を憑みこゝ八十万騎一時に動と押寄せく殺気を含む鯨波の声城中の勢もこれに應じ矢間の板を鳴し艇を打いく同じく鯨波をぞ揚たりける其声

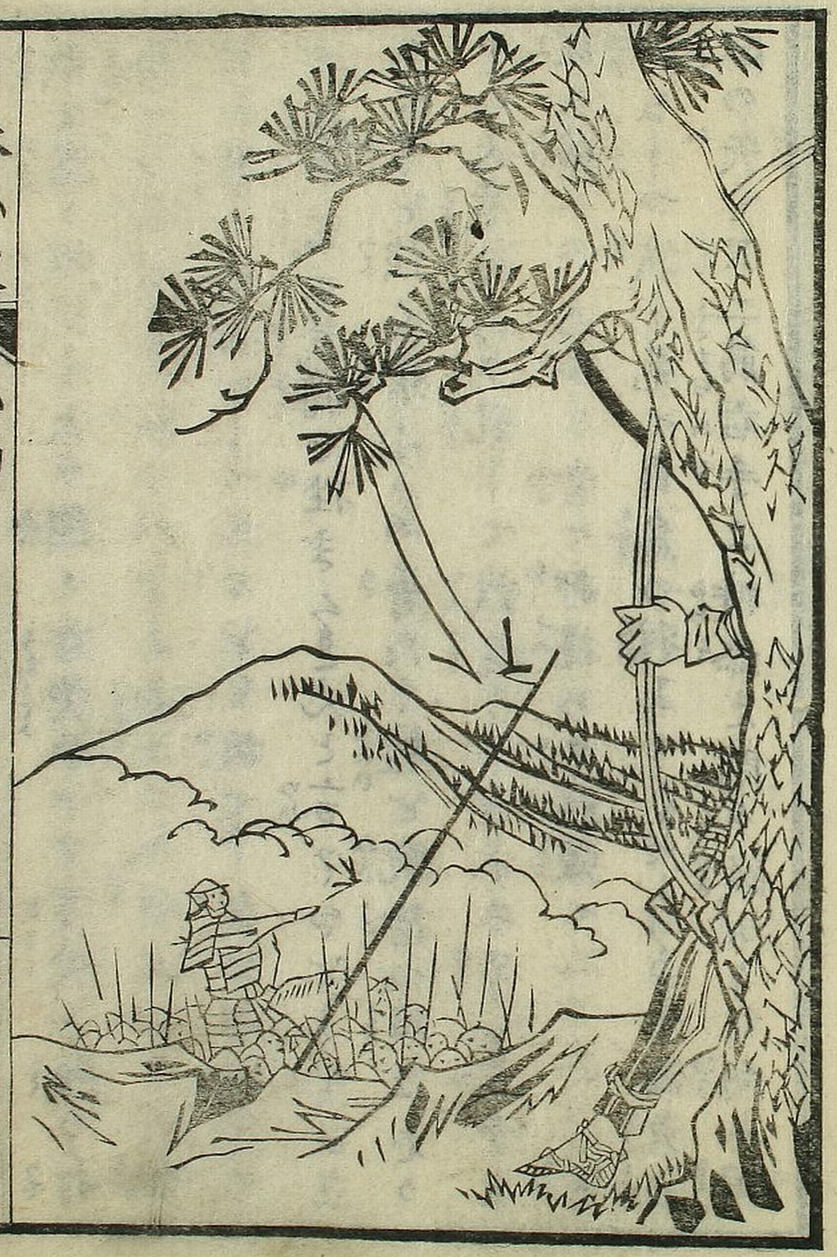


天地を震動し坤軸を此時に崩れやまくんと夥しく寄手既に堀の際まで攻め寄せ埋草を以て堀を埋め焼草を積んで櫓を落さんとせける時三百余箇所の櫓より射出す矢は雨の如く更に浮矢もたゝざれば楯の外に旗の下に射伏せらるゝ死生の境を知らざる者三千人に余り此勢ひに辟易して少し怯んで見えたる處を時機は冱し義助は脇屋堀口江田大舘の諸將を従へ六千余騎を引率して三の木戸を押ッ開き叫き喚んで驀直に賊軍のうちに懸入く

南北より馳違ひ東西より蹴散し縦横無下に暴廻る賊軍あまた度と失ゐひ乱れ立る折も折り湖水に浮べる兵船へ迅くも岸辺に漕寄せ雨さ一矢遠矢筋違ひ矢に矢種を惜まず散々に射たりけるさまを多勢の賊軍も左右の横矢に射立られ面を抗べき様もなく剌さへ義助の軍に懸立られ叶はじとや思ひけん まさ本陣へ引退ぞく其後へたぐ矢軍ぞうをして寄手の賊軍へ遠攻を主とし官軍ハ城を落されじと守り居るゆゑ両軍互ひに相持して捗々しき戦争へる

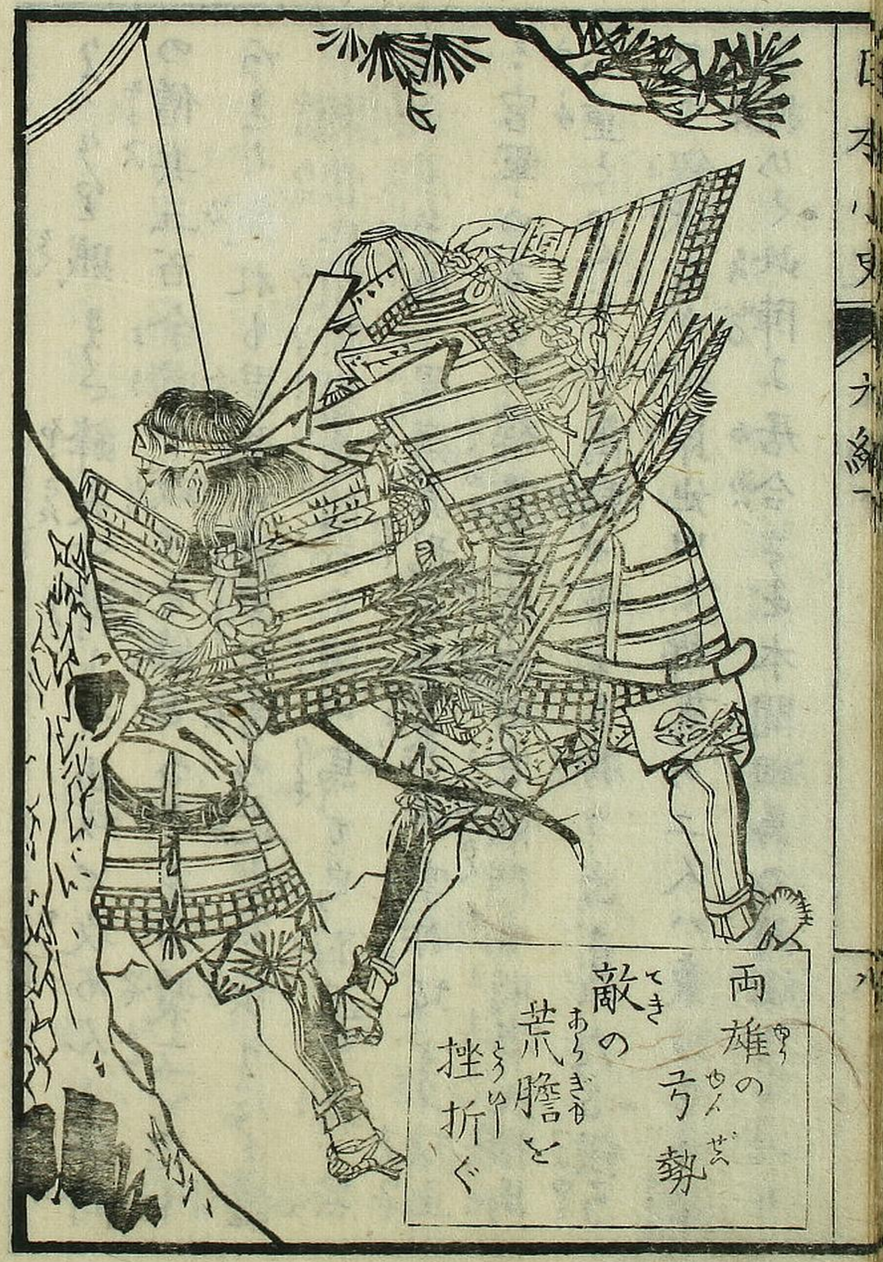


うち賊まさ鋒尖を轉じて西坂を攻めんと熊野の僧兵五百余騎を以て先鋒とるをそのの裝立を見て ハ見た孰れも黒革の鎧甲に指の先まで鎖りたる籠手髄當半頬膝懸透間なく闇の烏か烏羽玉の真ッ黒装束黒糸威一異類異形の装束にて雲母坂より攻上る官軍の方へハ綿貫五郎池田左衛門本間資氏相馬忠重といへる十萬騎が中より勝り出されたる強弓の手鍛錬の折節池田と綿貫の二人へ東坂本の敵より抗ひく此陣に居合さぞ本間相馬の両雄へ寄来る








両雄の弓勢
敵の荒膳を挫折ぐ

敵を遥に瞰下し大口開て打笑ひアナ可笑き賊の打拾うるを廣言なれ似られども吾々二人向ふうらへ今日の軍に諸君として太刀をも拔せず矢をも射させず疾や賊の荒膽を挫ぎうまんと言つゝやをら坐を立ちて弓を強く牽んとあ着たる鎧を脱捨つ膝立ざうの大童髪ふり乱して戟迫りの白木の弓を左手に取り傍への大木に當て押撓め弓弦張て二ツ三ツ空弾るを一つ試に見て白鳥の羽にてたゞたる十五束三臥の矢を只二筋右手に持添え閑々敵にうち向ふ相



馬も同じく七人張の大弓を左の肩に打ちさげて悠々として起出つ一ト叢茂る松蔭に人交もなく只二人弓杖突てぞ立さうるる去る程に賊軍の中より身の長八尺ばかりなる男の一ト荒だたるが鎖の上に黒革の鎧を着五枚甲の黒緒を締め黒半頬の半面に朱と濯ぎ九尺ばかりもあるんうと思ふ太やうなる樫の棒を小脇にかい込み猪の目透したる鉞の歯の亘一尺計なるを右の肩に振りさげて少しも猶豫気色なく小跳りして登る有様へ悪鬼羅刹の荒さる

如く當り難くぞ見えよる距離二町ばかりよ近付
よと見る間よ小松の蔭より奮然と躍れ出る本
間資氏件の弓よ矢をつがひて忘るゝ計りよ引絞り彈
弗と射て放てば矢坪違はず彼の黒武者が胸脇ハツ
シと射貫ぬく後缺く痛手よ暫しも得堪えず鬼欲人
欠と見えつる暴雄持たる鉞投出し小篠の上よ磔と
臥を續いて進むも法師武者以前の男よ一層倍しく
作り損ぜし二王の如く眼圓よ鼻低く虎髯左右よ振
分るが同じく黒の鎧甲大長刀と突立て尚懲ぜず間



よ進み来る相馬い樹蔭を走り出で弓よ矢をつがへきり
くと沓巻殘さず引詰て弦音高く切て放てば甲の
真向より眉間の脳を射碎いて鉢巻の板の横縫きれ
て矢尻の見ゆる計りよ射込まれば苦と一声叫び
もだえ仰天よ倒れて死んでより憑き切ッたる荒
武者の二人まで脆くも撃止し弓勢よ舌を揮ッて驚
き怖れ跡よ續きし熊野勢前へも進まず後へも退き
立たるまゝよて猶豫居るを本間と相馬へ見向もや
らず左もそそのかゝめと冷笑ひ遥後よ隔たりたる味

方の陣よりも向ひ最早戦端を開くよ間もなるまと
と覚え候らへ射藝と習ふたる適ま一ト矢仕つらん
何ぞ的よ立させたまへと呼ばれを開き西白一
と打奥ト月を畫きー紅ひの扇を矢よ狭きみて遠的
場ぞ立たりる両個の射手い右左よ立別ま月と
射るを恐ま為り左右の端を射るべーと相約ー相戒
ーめ齊一く弗ツと射て放てば毫末も違へぞ中心る
る月を裁ーて筋違ぞ射縫たる百歩を隔て柳の葉
を射切りー養由基の射藝ふも優ぞ劣らぬ両雄ハ百
矢二腰取寄せて張替の弓の寸引ーて敵陣よ向ひ大
音あげ本間資氏相馬忠重二人ま の陣を堅めく候
らへぞ矢一筋受られぞ物の具の善悪を試ー候らへ
と高らふ呼ばりれを寄手二十万騎誰追とーも
無れぞ我先ま と周章狼狽き一ト戦ひの戈を交
へぞ又本陣へ引返ぞ山徒光澄叛きく賊よ應ト夜る
賊兵を導ひ来り攻む勝ぞも嘗て油断せざる官軍
ハ兜の下緒をあ直ー忽ま撃て逆寄よ攻め討れ
生く還るもの僅よ三人残り少るく討ぞよりり官軍

豫ドめ約と固め西坂よ敵寄せるべ本院の鐘を撞き東坂よ軍起らハ生源寺の鐘と鳴らして東西互よ應ドその急と救ひ合ハんを手筈と定めあるたりしよ一日諸々の山より多くの猿猴集まりて東西の鐘と撞立てるれを誰ろ一人警しめざるなく猿猴の所為ともも思をねべ軍始まりしと諸軍勢一時よどんと起りたち出陣の準備閑なき折ろり賊軍おもよ驚ろろスハ官軍の方より逆寄るまと覚えそりして何もも急よ驚きたち上を下へと混雑なを周章大方ら



らぎりそる閑を得たりと官軍ハ諸門を開いて撃て出でけるる程よ賊軍ものしい支ゆるものろり崩れ立たる癖なをべ一下足も留らを敗走なを軍機いみトき服屋義助東西五百余箇所よ火を放ち追風を脊よ迫り撃つ賊軍の八十万騎さーを嶮しき今道古道音無の滝白鳥三石大嶽より人なだれ放突をそぞ逃たりる谷深くして行ぢまりさる所なれば弥ゞ上よ落重なりて死よるる形状を傳へ聞く治承の昔ー平家十萬餘騎の兵木曽ゞ夜撃よ懸立られて倶利伽羅谷

群猿戯を之梵
鐘城撞き賊軍
為よ狼狽ー官軍
為よ勝利を
博す

より理なりとも是より過ぎと覚えたり此時より官軍の急に追撃まつらんに賊を靈おろしよせんと易うるなれより山門の軍機區々にして未だ決せざ程再數日を経過せうち賊まさに四方より馳集まり以前より弥まさを大軍となり殘淺墓より官軍を知らず絶えなんざるより京師の賊軍小勢なりと聞く十万餘騎を二手に分け今路西坂より攻上る尊氏光嚴帝を狭さきみと東寺より拠りて城を築き兵を京師に出して官軍を要擊を官軍利あらずして退きく徳て暫



し合戦もなりざりるより藤原師基北國の兵三千余騎を以て山門より馳まゐる官軍あるより力を得て諸將集まり議して曰く前日の戦ひ京中より攻入し敗を取る所以あり此度い二條と西より内野河原へ駈出で二道より押寄せるを如ぞと軍議爰に一決せしとまの謀畧いと浅さらん尊氏あを聞きまして六十万騎の勢と三手に分ち二十万騎を東山と七条河原より出し別隊二十萬騎を船岳山の麓神祇官の南に伏勢とし左右より挟を撃さんと

構へまゝと二十万騎を西八條東寺の辺りゝ扣へさせて軍門の前ゝ置きたり是は諸方の陣強くして敵ゝ駈散されゝべきの新手ゝ換んたゝかふ去る程ゝ明日べ十八日の卯の刻官軍は二道より鯨波を揚て押寄せり京中の在家数百箇所ゝ火を放てば折しも風さへ吹きなびく看るく黒烟天ゝ漲ぎり猛火を毒蛇の舌ゝ似たり西軍の射かける矢は雨のごく振閃めく白剣戟の光電のごとし謀り設けし官軍も却つて敵ゝ裏とかくとその謀畧合期せざるに一戦ゝ打負て跡へくと引き程ゝ賊の大軍なれや重なりく新田義貞兄弟の勢と十重二十重ゝ取囲を逃しゝせじと攻め戦ゝ去れども義貞の兵士等一以て千ゝ当らざるなく何ぞ劣らぬ強勇なれば蹴散し蹈退け物ともせぬ人なき境と行く如く且戦ひ且走り心なづるゝ引返せり兵法ゝ言へるあり謀おと泄れば則ち利なしとさも良将の義貞も秘密の謀略洩さたるのみゝくゝの失敗を取りしを返をくも遺憾なれど官軍二度の敗軍ゝ士気大ひゝ挫けしうべ天子

深く震襟を悩ませらるる山徒の心を服さしめんため
食邑と叡山の僧徒に賜ひ南都の僧兵を招ぐ南都
の僧兵食邑を賜ふと聞き喜こび勇んで忽ち官軍
に應じ畿内の兵も續いて相集まり勢ひ以前に十倍
し賊の四方を取巻て兵粮運送の道を断切りしかば
賊軍大ひに窮迫し洛の内外を掠め豪家の財宝を掠
奪まるよう人心さぞかし背きて皆官軍に慕ふ義貞是
に於て出て戦うんと議し四國の兵を遣はして阿彌
陀ヶ峯に炬火を焼き連れ諸軍一齊に勢ひ合せ



せて進撃せんと出陣の準備残る隈なく整のふ天子端近く出御まして親うう諸軍を慰労ひたまひ
穿せたまふ緋の袴を脱ぎて三寸づつ切裂く所望の
兵士に賜ひて笠識とるさしむ義貞天恩の辱けなさと
拜謝し出陣に臨み奏して曰く勝敗は兵士の常な
れども豫めトきべうぞと虽もそも今日の戦ひ尊氏
の陣へ矢を射入れざる間は生く再び帰らじとと
そ覚悟なして候らふと勇気を含む義貞が頼もし
き詞を聞こせたまひ龍顔殊に美えしく莞示と笑

して入りたまふ疾進撃と義貞がうち振る采配太鼓の音色殺気と倶に立のぼる中黒の旗をみるが人〻義貞義助二万餘騎を率ゐて今路西坂本より三手に分まして押寄せる一ト手は義貞義助江田大館千葉宗都宮等その勢合せて一萬余騎一ト手は名和長年を大将として仁科山梨土居得能春日部以下の勢五千餘騎總大将義貞の旗を中に押立て鶴翼魚鱗に備へを立て猪熊を下りて押寄たり一ト手は藤原師基部下の諸将を従ゑ五千餘騎四條を東へ進撃き阿彌陀ケ峯に陣を取たる別隊諸軍の進むを見ぎ今熊野まで下り立ちて暗号の狼煙と上ると齊しく官軍所々に火を放ち火勢と背に進撃るを賊の大軍に比ぶれば寄手の官軍小勢なりとぞもさーも名将の美貞先日度々の軍に打負ておくびとそ會稽の恥を雪がんと牙を噛を名を恥づと聞きぬるに両帝國を争そひたまふ聖運も新田足利多年の間結んで解ぬ憤然も只今日の軍に定まりぬと思たれば去程に六條大宮より戦端を開きて尊氏の勢二十万騎と義貞の二万騎と

義貞単騎
尊氏を
呼で戦ひを
挑む

入乱れて戦ふよう射違へる矢ゝ夕立の軒端を過る音よりも猶滋く打合ふ太刀の鍔音は空に應ふる山彦の鳴止む暇もなう義貞行々賊軍を破り群がる賊軍の真中を駈抜けく押通り終に尊氏が籠り居る東寺の城に押寄せ今は斯と義貞は旗の陰より馬を打寄せ城を睨んで弓杖を縋り声高らかに呼はるやう天下の乱れ既に久し是國主両統のお争そひとへ申しるがら畢竟義貞とかん身と結んで解ざるの私怨なるのみ僅ふその身の功績を立んと



して罪なき人を苦しめんより獨り身を捨て雌雄を決せんと欲せば箭一筋まゐらせん受てみよと見よやと呼たりつ弓に矢をがく引絞り弦音高く切て放つその矢二重の高櫓の上を超え尊氏の座したる帷幕の中の柱に一揺ゆりさぞ立たりる尊氏これを見て起あがる我兵を挙げて鎌倉を立しより全さく君を傾むけんと思ふにはらぞ只義貞に遇ひて憤どろりと散ぜんさまあり望む所ぞ撃て出んその門明よと焦立を上杉憲定諫めて言ふやう箇い物ふや狂ひたまふ

欤義貞漫ろに深入りして引方なきまでかゝる事とや
言ふべゝん大事のかん身を忘れたちひ彼と雌雄を
決せんとて匹夫の勇とのみまくのみ止まりたまへと
鎧の袖をかろと握り放さねば尊氏も理有と悟りて
その侭よしく止たりしが此時官軍の別隊こゝに敗れ
名和長年も戦死して一朝の露と消失せ賊いまをく
勢ひ加わり義貞が二万餘騎を中に取込め逃しいせ
ドと揉だりを堅き紙挫き強き紙制をるさしも剛
勇の新田勢も寡い衆に敵せず残餘少なく撃るされ



敵ら味方ら入乱れいとも烈しき奮撃突戦飛来る流
れ矢義貞の額に発矢とたちまちに鮮血淋漓眼に沃
ぎ急所の痛手に義貞もなや是までなりと覚悟を
決め馬の平首立直し最期の合戦花々しく合ふてゝ
離れまたゝれて合ひ既に危きその折ゝ帝より下
し賜ひし紅色の笠識と着し武者八百餘騎そこなく
より現われ出で義貞を中に擁して賊の囲を突破
り辛くも此所を斫り抜けて漸やく山門へ引かへす
官軍数度の敗北に士卒の気も挫折して兵粮さへ

よ尽たる上賊よ四方を取巻くを出るよ道なく帰る
よ家なし或ひハ逃て影を隠し或いハ賊よ降参し官
軍ひく落失て頼こ少く見えよ尊氏伴ひくく
密ひよ使者を遣ハし降参と乞ひ帝の還幸を乞ひさ
るよ天子かぞくも尊氏ガ奸計よ欺むれ諸将も又
賊の招ぎよ應ドて心を通むる者多し藤原実世迅く
もあの事を窺ひ知り急ぎ使者と義貞の営所よ遣り
尊氏の奸計とぞ告げたりるる折しも義貞諸将を集
りて軍旅の勲を慰さめんと酒うち飲て在さりしガ

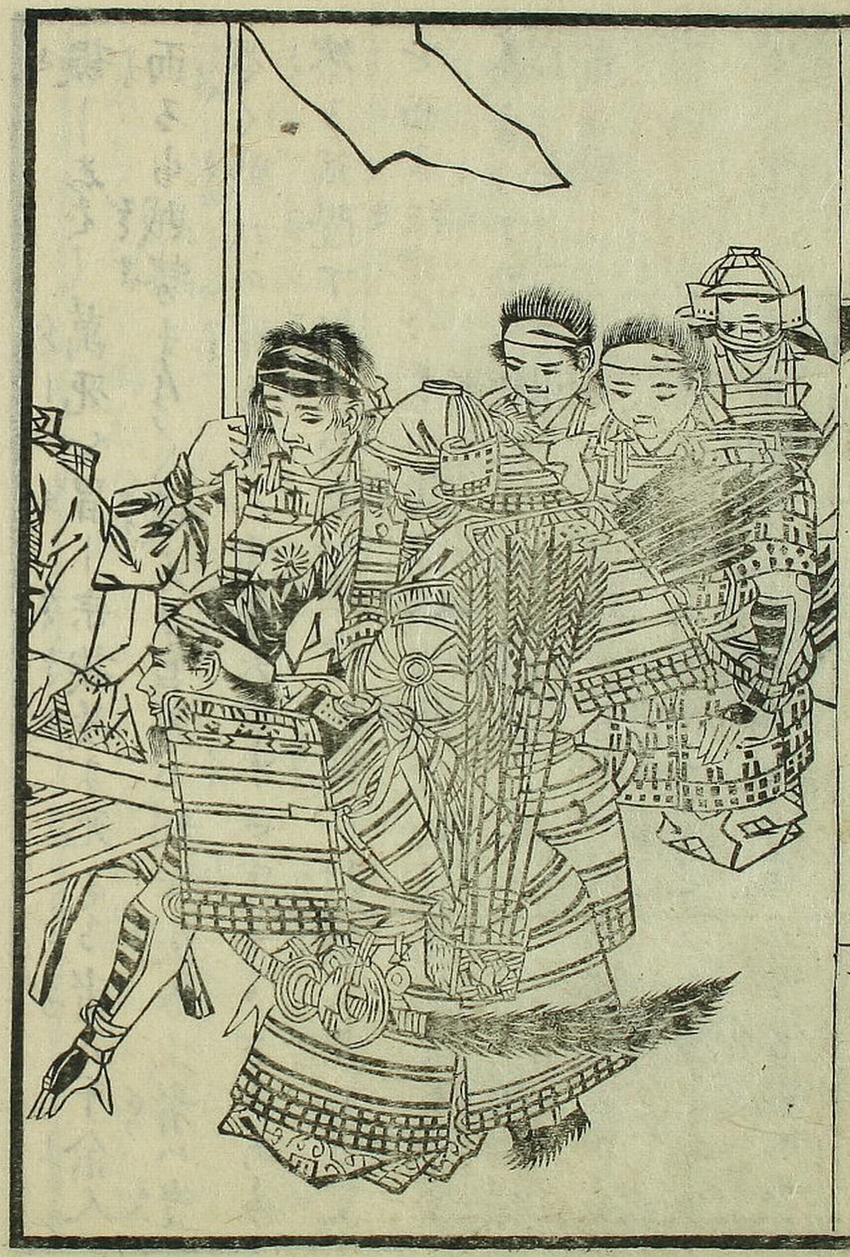


今との報せを聞くと虫ども更よ信とせざるみぞ開
いた大うよ取次の聞誤まりうる使者の口上違ひるるべ
しとて気よ止める気色ひるぬを傍よ侍る堀口貞満
席を進んで言るやう此暁き江田大館うち揃ひ用も
あるよ中堂よ赴むくとて登山せしあそ怪しきれ貞
満先づ内裏よ至りて事の虚実を探るべしと馳せん
行在よ至るべ是いそも如何よ臨幸ゆ今の程と見え
て供奉の月卿雲客衣冠を正し諸将前後を取巻きく
乗輿已よ駕したまよ貞満左右よ揖して進ミ鳳輦の

轅に取付き涙を流して声曇らせ臣道路の風説を聞き未だ嘗て信ぜざりしに此況様へ何事ぞや義貞何の罪なきに陛下を棄たまひ却って反賊を庇ひたまへや抑も義貞元弘の初めに當り詔辞を奉ずて義兵を挙げ僅か十日を経ぬうちに國家の逆賊北條高時を一撃の下に誅戮し以て震襟を安んじ奉る古往の忠臣に優るとも劣らじと思ひもよらぬに曩に尊氏叛きてより一族挙って王事に勤め陛下のさゝやかに命を鴻毛の軽きに比し義を泰山の重きに

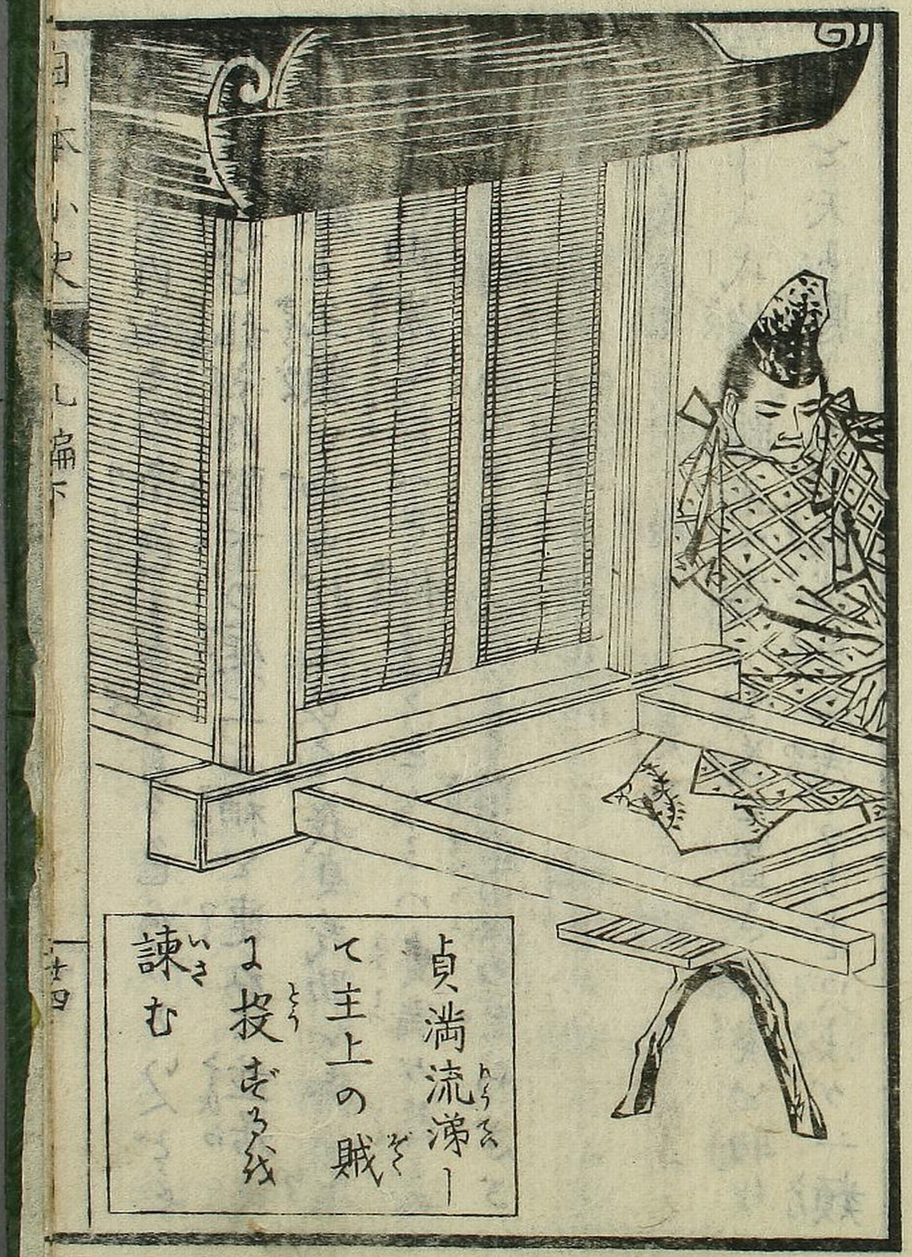


擬し赤心を萬死に冒して宗族義に死する者八千余人而るに賊勢ますます熾んに官軍の利を失ふに者へ豈尽く戦ひの罪なるべんや蓋天の未だ定まらざるのみ然るに陛下顧みたまはず今日賊の計策に陥り駕を西に枉げたまへば強て賊に投ずたまへとなるべき義貞以下の一族見に在る者五十余人を召して死を御前に賜ふて後発したまへと怨みの眼尖朱をそゝぎ誓侍中の血も斯やとぞうめ叩頭誓首して諫奏を暫らくなりて義貞朝臣父子兄弟三人兵三千余騎を召








貞満流涕して主上の賊を投ぎ捨て諫む

具して参内をその気色ある怒る色かりといへども
而も禮義を乱さじ階下の庭上に袖を連ねて並居さ
う主上殊に玉顔を和らげ玉ひく義貞義助と御前近
く召され御涙を浮べて仰せらるゝ貞満が怒りの
諫奏その謂れあるにより孫ども猶遠慮の足らざる
に似たり尊氏超涯の皇澤に誇りて朝家を傾けんと
せし刻義貞もその一類なるべし定めて逆に黨せんと
覚えしに氏族に離れて志しを美を置き傾廢を助け
て命を天に懸し敢感更に浅からぬ只決が一類



を四海の鎮衛とし天下を治めんとあるを思ひつる
に天運未だ循環せず兵疲れ勢ひ廢れぬれば尊氏に
一旦和睦を謀り且らく時を待んに決して真実の
和順にはあらぬぞ此等の支を豫てしも知らせたくは思
ひしかど事の洩れんを恐れ偖こそ突然期に臨みて
遽に此義を発せしなり貞満が諫めにうて朕が告
ぐるの謬りを知れり朕京都へ出る後へ義貞朝敵の
名を負せんを知るべきぞ依て春宮に天子の位を譲
りて同じく此國へ下るべし天下の事大小とゝく義

貞ゞ成敗とーく朕ま晷らを仕へよう朕已ま汝ゞ
為ま匂踐の恥を忘る汝早く朕ゞ為ま范蠡ゞ謀畧を
廻らせと淚を流ーて宜ひられを然も忿まる貞滿も
併居る將士も齊一頭をうふ低て鎧の袖をぞ濡ーけ
る恁て義貞日吉の大宮權現ま丹誠を籠り討賊のを
を祈請ー春宮を奉ドて北國ま下り再び義兵を拳ん
とて其準備をぞ[illegible]

通俗日本小史九編卷之下終

大坂　前川源七郎　越後三條　青柳止兵衛
同　岡島貞七　同　加茂九屋音八
紀州和歌山　津田源兵衛　同　番場吉次郎
阿州德島　坂井萬吉　同　中條村山長太郎
遠州掛川　三原屋甚藏　同　長岡山口萬吉
同　二俣天井金藏　同　竹屋利七
三州豊島　泉屋兼藏　同　見附浅間屋長七
尾州名古屋　永樂屋東四郎　同　嘉坪屋由右ヱ門
同　美濃屋代助　同　六日町目黒宗内
同　中村重兵衛　同　潟町佐藤友吉
甲府山梨　内藤傳右ヱ門　同　越中屋與八
同　五明堂正八　同　浅野六平
同　小西屋庄左ヱ門　加州金澤　近八郎右ヱ門

同　武川半七
駿州静岡　今津美之助
同　大和屋利兵衛
相州小田原　曽比屋平七
同　翁屋重兵衛
同　厚木　高梨與左門
横濱　五天通り　池田孝吉
同　元町　田澤多一郎
武州熊ヶ谷　近江屋平吉
同　杉浦平左門
下總佐原　好文堂正平
同　境町　高木直一郎
上總東金　北村甚左門

同　木屋平八
同　柚木甚兵衛
同　岡本榮作
磐城三春　中村嘉兵衛
同　西村重兵衛
岩代若松　齋藤八四郎
同　福島　近江屋周助
同　光白屋清次郎
同　都田誠
同　白根屋藤五郎
同　島屋兼吉
同　萬屋長五郎
羽前山形　十一屋源助

豆州三島　堺屋又三郎
常州太田　會津屋茂兵衛
野州足利　山木屋金太郎
同　中村宗兵衛
同　今市　吉田屋長兵衛
上州前橋　橋本屋文次郎
同　伊勢崎　川木屋平吉
同　高崎　亀林屋卯兵衛
同　富岡　關文堂文次郎
同　沼田　塚田屋佐太郎
同　藤岡　松野屋貞吉
同　伊香保　小林源二郎
信州長野　小林屋喜太郎

同　島田為次郎
同　米澤　長谷川虎三郎
同　谷地　田宮五郎
同　上ノ山　萬屋利七
同　羽後秋田　木間金之助
同　角屋直治
同　松峯　熊登山五右衛門
同　佐々木長藏
同　陸中石巻　三陸屋利兵衛
同　及川甚七
同　一ノ関　牟岐鉄五郎
同　壺屋養藏
同　盛岡　澤田正助

同　萩原磯左門　同　八戸　石岡吉十郎
同　上田池田政教　同　仙臺　渡邊善七
同　鼠屋甲造　陸奥弘前　菊地正助
同　鳶屋伴五郎　同　青森　柿崎忠兵衛
同　松本　鰤屋重兵衛　同　渡島函館　菊地儀三郎
同　精草堂八十八　北海道小樽　魁文社
同　藤松屋禎十郎　同　札幌　佐々木常吉
同　水琴堂為吉　磐城南部　田村善兵衛
同　諏訪藤屋機左門　仙臺国分町　浦山太郎兵衛
同　同作四郎　越中高岡　山下平吉
飛騨高山　孫屋重兵衛　越後三條　國本吉右工門
越後水原　島屋六平　浅間屋傳右工門
同　三條　樋口屋小左工門　横濱　岩見巳之助


版權　明治十四年四月三十日
免許　同十年　月　出版

編輯人　大阪府平民　渡邊義方　日本橋區濱町三丁目壹番地寄留

出版人　東京府平民　辻岡文助　同區横山町三丁目三番地


010190513004